

W. S. Maugham の小説の歴史的概観

— その一 1897年より1914年まで —

脇 田 勇

Richard Cordell もその著書 *Somerset Maugham* において *Three Autobiographical Novels* の一章を設けて、*Of Human Bondage*, *The Moon and Sixpence*, *Cakes and Ale* の三つを取上げているが、Maugham の作品には自伝的要素が極めて多い。Goethe の「ウイルヘルム・マイスターの修業時代」に比較される *Of Human Bondage*, *The Moon and Sixpence* その他多くの長篇、短篇に、時には実名にて、もしくは Ashenden と名を変えて登場し、Maugham 自身の眼でとらえられた人生、人間が「一人称小説」の形式で展開されている。又 *The Summing Up*, *A Writer's Notebook*, *The Vagrant Mood* 等の随想録、批評集などには完膚なきまでに、自己について語っている。しかし、彼の世界観、人生観、人間観は何であろうかと追求して見ると、その全貌を尽すことは、ことほどさ様に簡単ではない。極論するものは、cynicism 以外の何物でもないとすら言う。小説家というものに対していただいている我々一般のイメージの尺度で計るには、余りにもその対象が大きすぎるといふ感をぬぐい去る事が出来ない。Maugham 自身「芸術とは、あらゆる人が享樂するものである時、はじめて偉大であり、有意義なものである⁽¹⁾」と語っている如く、一、二の作品から彼の思想を抽出して、これが Maugham だと明示することは不可能と言って過言ではない。筆者は、この小論において、研究対象を主として小説、特に長篇にしぼり、その創作技法及び内容の変化を概観しつつ、彼の思想の発展過程をたどるのが目的である。

(1) *The Summing Up*, Chap. 76, p. 299 (Heinemann).

多くの Maugham 研究家の先例にならい、三つの時期に分けて考察を進めて行く積りであるが、第一期は1897年から1914年まで、即ち1897年彼が処女作 *Liza of Lambeth* を発表してから、第一次世界大戦勃発までの間で、この間に *The Making of a Saint* (1898)、短篇集 *Orientalisms* (1899)、長篇 *The Hero* (1901)、長篇 *Mrs. Craddock* (1902)、長篇 *The Merry-Go-Round* (1904)、長篇 *The Bishop's Apron* (1906)、長篇 *The Explorer* (1907)、長篇 *The Magician* (1908) 等の小説と、*A Man of Honour* (1903)、*Mrs. Dot* (1904)、*Lady Fredrick* (1912) から *The Land of Promise* (1913) に至る戯曲約十篇が出されている。

第二期は1915年から1938年までである。1915年は彼の代表作 *Of Human Bondage* が世に出された年であり、1937年は Maugham が63才になり、劇壇からの引退を声明した年で、これまでの彼の総決算として翌1938年に *The Summing Up* を発表したのである。この期間は、彼の創作活動が質量共に充実し、六つの長篇、即ち *Of Human Bondage* (1915)、*The Moon and Sixpence* (1919)、*The Painted Veil* (1925)、*Cakes and Ale* (1930)、*The Narrow Corner* (1932)、*Theatre* (1937) と六つの短篇集 *The Trembling of a Leaf* (1921)、*The Casuarina Tree* (1926)、*Ashenden* (1928)、*The First Person Singular* (1931)、*Ah King* (1933)、*Cosmopolitans* (1936) と *The Circle* (1921)、*Our Betters* (1923)、*For Service Rendered* (1932)、*Sheppy* (1933) を含む劇作十四篇、それに三つの旅行記 *On a Chinese Screen* (1922)、*The Gentleman in the Parlour* (1930)、*Don Fernando* (1935) が発表されている。

第三期は第二次大戦勃発の1939年から今日に至る期間で、六つつの長篇即ち *Christmas Holiday* (1939)、*Up at the Villa* (1941)、*The Hour before the Dawn* (1942)、*Razor's Edge* (1944)、*Then and Now* (1946)、*Catalina* (1948) と二つの短篇集 *The Mixture as Before* (1940)、*Creatures of Circumstance* (1947)、その他に *Books and You* (1940)、*A Writer's Notebook* (1949)、*The Vagrant Mood* (1952)、*Ten Novels and their Authors* (1952)、

The Point of View (1958) 等の手記、批評集を出している。

さて Maugham は「私は批評家たちから、20代では残忍だと言われ、30代には軽薄だと言われ、40代には皮肉だと言われ、50代のときは腕達者だと言われ、そして現代60代では皮相だと言われている⁽¹⁾」と述懐しているが、以上述べた三つの時期の第一期とは23才から40才頃まで、第二期は *Of Human Bondage* を完成した41才から *The Summing Up* を発表した60代の初頭に及ぶ期間、第三期はその後の30年ということになる。彼の実験的試作的な第一期に対して、批評家は brutal とか flippant という表現で彼を評価し、創作活動が最も旺盛で成熟した第二期に対して cynical, competent という批判を下し、第三期の60年代に対し superficial の一語で総括しているわけである。果して、この評価が妥当なものであつたか否か、それはこれからの作品の研究の中で解明したい点である。

筆者はこの三つの時期の主として小説を解剖しながら、彼の小説が如何に出発し、如何に発展するかの過程を跡づけ、巨嶽の如くそびえ立つ Maugham という作家に一つの足がかりをつけるのが目的である。先ず第一期の作品の分析から、手をつけて行くことにする。

Liza of Lambeth

父親がパリの英国大使館顧問弁護士であったため、パリで生れ、育った Maugham は十才で両親に死別南イングランドで牧師をしていた叔父の家で成人したが、やがて肺を病んで南仏へ療養に行き、快復すると Heidelberg に勉学に行つた。彼はこの時代、作家を志ざし、文学修業に専念することを決心するが、作家志望を表明することに若干の気恥ずかしさを覚えるという社会情勢もあつて、医師として自活する方針を立て、London の St. Thomas 病院附属医学校に入る。*The Summing Up* に「警官でも立ち入ることを躊躇

(1) Ibid., Chap. 60, p. 219.

するような、怪しげな路次へ入つて行かなければならなかったが、そんな場所でも、医者であることを示す黒靴が、充分に私を護つてくれた⁽¹⁾と語つている如く、貧民窟の Lambeth に足を運び、産科の助手として63人もの赤ん坊をとりあげたのであった。この体験をもとにして、比較的短い小説を書き、それが出版されて文壇に出ることになる。これが *Liza of Lambeth* で Maugham 23才の時である。当時英国の文壇では Thomas Hardy と George Meredith が覇をきそい、Oscar Wilde の名声が上つていた。Shaw, Wells, Conrad もやっと頭角をあらわした頃であつた。この作品に描かれた世界が19世紀末の London であることは勿論であるが、その技法も19世紀末的であつたことは、後年の彼の作品と対比してみると歴然としている。しかし、この作家の出発してきた文学上の還境をうかがうためには、見逃すことのできない作品である。

Liza of Lambeth は、直接には、この貧民窟における体験と観察から生れた。Liza Kemp とい女性が、ふとした偶然で Jim Blakeston という、同じ町に住む、子供が5人もある中年男に誘惑され、彼女に純情を捧げる Tom という青年を斥け、Blakeston の子供を宿す。その事を知つた Blakeston の妻は、嫉妬に狂い、ある日 Liza を路上に待ちうけ、喧嘩をいどみ、衆人還視の中で大立廻りとなり、それが原因で流産し、はかなく死んで行く。この喧嘩の場面などまことに写実的である。この作品の序文で「私は虚構は殆ど用いなかつた。自分が見たり聞いたりしたことを、できるだけ平明に書いた。ひどく味もそっけもない感じがしたので、できれば空想を働かせて、刺激的な派手なものにしたかったのだが、そのやり方が解らなかつた。想像力が情けないほど貧かつたので、私は事実を固守するよりしかたがなかつたのだ。当時私は Guy de Maupassant を非常に尊敬していたので、私の小説を書くに当つて、彼の小説をお手本にした。若い作家が、しばしば悪いお手本を真似しやすいことを思うと、私が一つの物語をあの様に明快

(1) Ibid., Chap. 18, p. 61.

に、直截に、効果的に物語る天才の持主をお手本したことは幸福である」と言っているが、まさしく realism の小説であり、事実を平明に書いた所に、成功の原因があるようである。

Maugham の Maupassant に対する傾倒は非常なもので、その小説論、例えば *Altogether* の序文、*The Summing Up*, Chap. 56-59, Introduction to *Tellers of Tales*, *Creatures of Circumstance* の序文、*The Writer's Point of View*, *The Art of Fiction* (*Ten Novels and Their Authors*, Chap. 1) 等には、必ず Maupassant の名が出てくる。それは、*The Summing Up* の Chap. 23 で述べているように、明晰で、論理的な頭脳の持主であったが故に、フランス流の明快さを好んだであろうが、*Creatures of Circumstance* の序文その他を見ると、短篇小説の巨匠 Chekhov に対しては、それほど魅力を感じなかったのも肯ける。話の山がなく、情緒と雰囲気のみ伝える手法を高く評価していない。*Liza of Lambeth* 執筆の経緯は、その序文に詳述してあるが、彼は21才迄まで Ibsen ばりの one-act play をいくつも書いていた。所が売込んだ劇場の支配人から断われている。そこで、小説を書いて名声を博し、劇場支配人等が戯曲に注目せざるを得ないようにするのが、得策と考えた。当時 Fisher Unwin という出版屋が Pseudonym Library (匿名文庫) という双書を出して、かなり反響を呼んでいた。短篇2つを書き送つたが、この文庫に入れるには短か過ぎる、長篇があらば見たいと言ってよこした。そこで早速近い中に送ると返事を出して、早速この作品にとりかかつたのである。出版されて一ヶ月と経たない中に、再版が出たので、彼は作家として進む決心を固めるに至る。1897年 St. Thomas 病院附属医学校を卒業し、医師の免許状を得ると、作家になる為医業を投げうちスペインに旅立ったのである。⁽¹⁾

当時は、所謂世紀末の唯美主義の作家、即ち Pater や Wilde の全盛時代で、そういう文章に不得意な Maugham も、時代の影響をうけ、何とか彼等の様な文章を書こうと努力を傾けた。ある時は *Salome* の幻想的な言葉の

(1) Ibid., Chap. 29, p. 98.

色彩と珍奇さに陶醉し、自分の語彙の貧しさに驚いて、British Museum に行き、珍しい宝石の名や、古代上葉のビザンチンの色合いや、織物の感覚をノートし、他日こういう言葉を鏤めた文章を書きたいものと思ったりした。Jeremy Taylor の *Holy Dying* の文章に心酔したのもこの時期である。*A Writer's Notebook* の1900年、1901年頃には、この様な文章の例がいくつも載っている。スペイン旅行をもとに1905年 *The Land of Blessed Virgin* を書いたが、こうした調子の文章であつた。「今でもアメリカで少しずつ売れているので、書きなおす手間をかけてもいいのではないかという気になった。しかしそれは、すぐに、不可能だとわかった。この紀行は、わたしが完全に忘れさつた何者かの手によって書かれたものであつた⁽¹⁾」と言っている。勿論後年の彼の作品は、此等の世紀末の作家達とは異なる方向に転開して行くが、この唯美主義の影響が全然消滅したとは思われない。例えば、*Of Human Bondage* の主人公が到達する人生を一枚の Persian rug になぞらえる人生観、*The Moon and Sixpence* (1919) の Strickland が、この世的なあらゆる桎梏を放擲して芸術に生きる態度、*The Painted Veil* (1930) のヒロイン Kitty が、中国の奥地の町の城壁の妖しい美しさに恍惚とする場面などに⁽²⁾、それがうかがえる。

Maugham は天才型の作家でなく、長い間の修練と、意識的に他の作家の手法を学ぶことによって大成した作家である。その文章修業の経緯については、*The Summing Up* の Chap. 9, Chap. 10 に詳細に述べられている。後年の彼の作品に見られる文体、diction, surprise ending (落ち) 等の複雑な技巧など全然なく、単純であるが、勁い技法が駆使されていて、純粹な効果を生んでいる。60才で選集を編んだ彼が、読み返して失望しなかつたユニークな芸術的内容と価値がここにはある。前述の如く、Maupassant から学んだ自然主義の影響は、説明を要しない程明白にあらわれている。発端の人物

(1) Ibid., Chap. 9, p. 25.

(2) *The Painted Veil*, Chap. 58 (Heinemann).

の紹介から、妻子のある男との恋愛の成立と推移、恋人の妻と Liza の争い、そして死へと、女主人公 Liza の性格と境遇との発展が、ほとんど公式的な順序と均整をもって進行する。この様な型の小説を彼は後に書いていない。描写の上でも、全く会話と動作により叙述を運んでおり、心理描写などは稀にしかしない。この時代の Maugham が Ibsen に影響をけ、彼の野心は劇にあり、事実この作後10年間にその野心を成就して、一時代を席捲する劇作家に生長して行った事を思い合せると、この様な傾向は当然であったと考えられよう。ロンドンの下層階級の生活、貧しさと無知からくる救いのない社会悪に対する Maugham の態度には、problem play をひっさげで、社会の解放に立上った Ibsen の姿とどこかつながるものが感じられる。「病院の外来患者部とか、産科係りとしての勤務中に廻った地城で出会った人達や、職業柄、家から家へと往診する時に感銘をうけたり、ぶらぶら歩きながら眼にうつった事件などを、なんら付け加えもせず、誇張もせずに描いた。私には想像力がかけていたので（というのは、想像力とは訓練によって成長するものであり、一般の考えとは反対に、未熟な青年より、円熟した大人の方に強いものだからである）、自分の眼で見、自分の耳で聞いたことを、極めて卒直に書くより仕方がなかった」と述べているが、そのリアルな描写の中に、作家 Maugham の独特なポーズを見逃すことができない。10代の Maugham は、英国の小説家よりも、幼少年期を過したフランスの作家に親しみを持ち、Maupassant から Stendhal, Goncourt兄弟, Flaubert, Anatole France へと向ったのである。彼は無感動の態度で Victoria 朝末期の社会を眺め、身辺の貧民窟にうごめく人間の姿を容赦なく、観察し描写したのである。

John Brophy はこの様な態度に、clinicalism (臨床主義) と名づけ、それは創造的芸術家よりも、記述的学者によくある、感情に動かされない、意識的な、観察の習性であると述べている。そして、その clinicalism はコスモポリタンのと呼ばれる生活に育てられるという説明をしている。筆者は、後日 Maugham と旅の問題にふれる積りであるが、それとも関連があ

るので、やや長いが引用してみることにする。

This clinical attitude should not be regarded merely as a by-product of Maugham's medical training. It is almost certainly temperamental, inherent in the man, and nourished by his admiration for the 'objective' school of French literature and especially for Maupassant, who was himself a literary disciple, and indeed a pupil, of Flaubert. Cinicalism is closely related to those religious and philosophic opinions which Maugham has expounded from time to time with some explicitness, and it is an outlook often fostered, if not produced, by the habit of life which is commonly and conveniently called cosmopolitan. To be an accepted cosmopolitan it is not sufficient to travel: the wanderings must be conducted from several bases, those bases must be large capital cities, and the traveller must be on intimate terms with their most influential communities. Maugham appears to fulfil the conditions. Born of English parents and schooled at Canterbury, he studied at the University of Heidelberg before taking up medicine in London. Since then, his travels have been frequent and extensive, taking him to India, Burma, Siam, Malaya, China, the South Seas, Russia, and the Americas — but his homes have been made in London, Paris, and New York, and on the French Riviera which forms a kind of seasonal annexe to those three capitals.

(この臨床家的態度を、単に Maugham の医学修業の副産物にすぎぬと考えるべきではない。それはほぼ間違いなく、天性的なもので、彼が持って生れ、フランス文学における「客観」派、特に Maupassant に対する傾倒によって養われたものである。というのは、この

Maupassant は Flaubert の文学上の門下、いや実際の弟子だったのである。臨床主義は、ときおり Maugham がある程度あからさまに述べている、宗教や、哲学上の意見と密接な関連を持っていて、それは、ふつう便宜上コスモポリタンのと呼ばれる生活習慣によって、生み出されないまでも、育てられることの多い見解である。自他ともに許すコスモポリタンとなるためには、各地を旅行して歩くだけでは足りない。すなわち、その遍歴はいくつかの基地から行われなければならない、その基地は大きな首都であることを要し、巡歴する人はその首都のもっとも有力な社会と親密な間柄でなければならぬ。Maugham はこの条件を満しているように見える。イギリス人を両親にして生れ、カンタベリーの学校で教育を受けた彼は、ハイデルベルヒ大学に学んだ後、ロンドンで医業に従事した。それ以来、彼の旅行はひんぱん且広範範囲にわたり、インド、ビルマ、シャム、マレー、中国、南洋、ロシア、南北アメリカに行っている——しかし彼が家庭をかまえたのはロンドン、パリ、ニューヨークと、この三つの首都のある季節における別館ともいふべきフランス領リヴィエラであった⁽¹⁾

この見界に対する批判は、項をあらためて評述することにする。*Liza of Lambeth* は Maupassant 流に dry で cold であるが、優れた小説であった。言わずもがなの、詳細にすぎる情況説明や、グロテスクな Cockney スラングがあるにしても、Hogarth の絵の様な生氣を持っている作品である。Richard Cordell もこの作品の特色に関し次の様な批評をしている。

The gramophone, radio, television and films, the motor-cycle and second-hand cars (and many new ones, too), as well as sanitary council flats and universal education for the young, with daily orange juice and milk provided free in the schools, and

(1) John Brophy: *Somerset Maugham* (Writers and Their Work No. 22), p. 11.

adult education centres have made Liza's East End as remote as Moll Flanders' and Oliver Twist's. But it is a real world in the novel, and its people live and breathe; for the slum doctor knew Liza, her gin-loving mother, and Jim, their street, their homes, their interests, their language and manners, their human weaknesses.

(グラムフォンも、ラジオも、テレビも、バイクも、セコハンの車も新車もまた、公衆衛生相談所や、青少年の義務教育や、学校無料給食のジュースやミルクや成人教育センターと共に、Liza のいたイースト・エンドを Moll Flanders や Oliver Twist のその様に遠い昔のものとしてしまった。しかし、小説の中では、現実の世界で、その中の人物は生きて呼吸している。それは、作者モームが Liza や、ジンの好きな母親や、Jim や、その連中の街や、家や、その興味の対象や、言葉やマナーや、人間的弱点を知っていたからである。⁽¹⁾)

しかし、この作品に対して批評家は、必ずしも好意的ではなかった。それは Victoria 朝の晩年頃は、自然主義的文学は、批評家の支持をうけることが殆どなかったからである。George Moore は呪われ、Arthur Morrison や Gorge Gissing も無視されていた。Thomas Hardy は *Jude the Obscure* に対する反感に意気阻喪し、小説の筆を絶った時代であった。それにもかかわらず、今にして思えば、スラムをリアルに、客観的に描いた英国の最初の作品として重要な意味を持つのである。このスラムの住人はウエスト・エンドの住民より primitive であり、且 naïve であり、彼等より本能的に行動すると共に、ブルジョアジーの如くつまらぬタブーと仁義の世界にまきこまれている。Maugham は、Maupassant や Flaubert の如く、その姿を赤裸裸に報道することに満足し、批評を加えようとはしない。故国の批評家の白眼視にもかかわらずフランスの著名な批評家 Auguste Filon が *Le Journal*

(1) Richard Cordell: *Somerset Maugham*, p. 113. (Heinemann).

des Débats に心あたたまる批評を書き、彼の住んでいた下宿のおかみ Mrs. Foresman がウエストミンスター寺院で後に副監督となった Wilberforce が説教の題材にこの本を用いたと語った時、作者は狂わんばかり喜んだのであった。間もなく出版屋の Fisher Unwin が、第二版が直ちに出ると語ると共に、彼は医業を捨て、作家になる決心をしたのである。

Mrs. Craddock

第一次大戦の勃発に至る迄に書いた小説は、*Liza of Lambeth* の外に *The Making of a Saint* (1898), *The Hero* (1901), *Mrs. Craddock* (1902), *The Merry-Go-Round* (1904), *The Bishop's Apron* (1906), *The Explorer* (1908), *The Magician* (1908), と短篇小説集 *Orientalisms* (1899) であるが、Heinemann の選集には *Liza of Lambeth* と *Mrs. Craddock* の二作しか入れていないのを見ても、この二作以外は、エチュードの域を脱していないと言つてよいであろう。彼自身「この二篇 (*Liza of Lambeth* と *Mrs. Craddock*) を除いて、職業作家になってから最初の10年間に書いた小説は、自分の仕事をおぼえようとする実地練習であった。なぜならば、職業作家を悩ます困難の一つは、彼が一般大衆の犠牲において、技術を習得しなければならぬことである。彼は自分のうちなる本能によって、書くことを強制される。しかも、頭には主題があふれている。彼にはそうした主題を取扱うだけの技術がない。経験はせまい。まだ未熟で、自分の持っている才能をどう利用しているか知らない。そして、書きあげたらできるだけ出版しなければならない。それは生活をするための金を得るためもあるが、また、活字になるまで、自分の作品がどんなものか、自分でもわからないし、友人の意見や、批評家の批評をま⁽¹⁾って、はじめて自分の誤りを知ることができからである」と語り、大部分の作家は、人生をもっと知り、もっと技巧に熟達するまで手がけな

(1) *The Summing Up*, Chap. 44, p. 165.

ったら、有効に使えたら思われるテーマを無駄ににしていると言うのある。よしんば、彼自身認める如く、荒けずりの、欠点の多いものであろうと、彼の小説の発達の歴史的意味は見逃せないとともに、それなりに面白味を持っているのである。手際よく纏めて、形の美しさを保とうというような態度をとらず、持てる全精神をかたむけて、頭の中に泉の如くわきあがってくる発想を、なりふり構わず書き抜いていったという印象を与えてくれる。執拗さがあったればこそ、そこに *Of Human Bondage* や *The Moon and Sixpence* がはじめて誕生するのである。この時代におけるもう一つの特徴は、小説の手法が、一作ごとに変化していることである。*Liza of Lambek* はリアリズムの小説、*The Making of a Saint* は歴史小説、*Mrs. Craddock* はテーマ小説、*The Merry-Go-Round* はオムニバス小説、*The Magician* は恐怖小説といった具合である。上田勤氏の「Maugham がまだ本当の自分のものと言えるものを発見できないで、暗中模索している姿だと考えられないこともないが、それよりも、文学や芸術に対する考え方が、我々と多少違うのではないかという風にも思われる。つまり彼の考え方の中に、多分に『芸』とか『遊び』とかいう要素が入っているためではないだろうか。彼は二言目には『職業作家』だというが、こういう言葉を使う Maugham の気持は複雑で、その真意を掴むことは難しいにしても、いわゆる『職業作家』たる素質が、多分に彼の中にあつたことが、初期の小説に見られる手法の眼まぐるしい変化⁽¹⁾ということの中にも感じられるのである」という見方は、肯綮に当たると言えよう。

London の名の通つた本屋にことわられて、やっと出版されたのが、1902年に出た *Mrs. Craddock* である。その拒絶の理由は、あからさまな性の取扱い、及び知的であるが熱情的で、自己本位の愚か者の野人を肉体的快樂の故に愛する大胆な描写にあつたのである。出版屋 Heinemann は刺戟的なくつつかの場面を削除する条件で発版に承諾した。Victorianism の因習

(1) 上田勤：モーム，p. 48（新英米文学評伝双書，研究社）

がまだしっかり根を下していた20世紀初頭において、偶像破壊の言辞や、官能描写が、いかにショッキングあったかは想像に難くない。

この作品の中の唯一の面白い人物は Miss Ley である。この作品を選集の中に入れたのは、彼女の存在の為であろうとも言える。Miss Ley はいい意味で世故にたけている。機知があるが、控え目で、人を裁かない。Edward 王朝の淑女の典型である。物語は悲哀に満ち、機知の色づけはあるが、ユーモアに乏しい。Bertha Ley は感情的な娘で、孤児で、Blackstable 近くの Court Leys の所有者で、旧家の名ごりである。彼女は、小作人の一人 Edward Craddock を愛していると信じ、自分に結婚の申込みをする様にしむける。Edward はよき農夫であるが、のろまな男で、結婚後、この事を彼女は、はじめて知る。子供を死産するや、彼女は別れる。彼女は魅力的な若い浮気者のいところ恋愛沙汰をおこすが、叔母の Miss Ley に救われ、夫の所に戻る。彼女のスピリットはすでに無く、夫のそれはもえさかっている。夫は公的生活に走り、地方の政治家になり、Freemason の指導的立場にもついている。Edward は、一度落馬して怪我をするが、それにもめげず、再度、「墓石は上等なのを注文してくれ」と冗談を言いつつ、自信の程を示しながら死んで行く。しかし、Bertha は他人のことのよう、それを聞いている。彼女は部屋に戻ると、Edward のあらゆる時代の写真が目に入る。あらん限りの勇気をしばって炉の中に裂き棄て火をつける。彼女の幻滅の一部は、宗教とともにあることをその時知る。Maugham は村の宗教を攻撃している。牧師とその妹が、戯画的に語られる。Miss Ley が我々の共感を呼ぶ。彼女は、社会の事情に洞察力を持ち、経験もある、洗練された女である。他は皆田舎者で、彼女だけコスモポリタンである。彼女は、Mrs. G. W. Steevens という実在の賢婦人がモデルと言われているが、L. Brander⁽¹⁾の言う如く、この作品で Maugham の典型としてあげれる最初の人物である。彼女は Maugham の心理分析の最初の実験である。イギリスの伝統を

(1) Laurence Brander: *Somerset Maugham, A Guide*, p. 16 (Oliver & Boyd).

象徴するような、現実主義的な男と結婚したロマンチックな個性の強い女主人公 Bertha は、この後の Maugham の作品に登場する女性の一つの型だと言えるであろう。

Richard Cordell は、この作品の価値は社会描写になく、肉体的基礎の上に成功を志さず結婚の、あからさまの追究であり、又魅力を感じている男性を恥らいもなく追い求める、肉体的欲望を持った女性の、卒直な追求であると言い、又 Victoria 朝の上品さ、求愛の儀礼というものが、批判の風にされていて、結婚に対する作者の探究的解剖があり、彼の小説の最良の一つであると賞讃している。

The value of Mrs. Craddock does not lie, of course, in its social picture : it lies in its candid study of a marriage trying to succeed on a physical basis, the equally candid study of a woman with strong physical desires shamelessly pursuing the male who attracts her. Victorian notions of modesty and the ritual of courtship were thrown to the winds. Here is Maugham's most searching analysis of a marriage. He makes credible the initial attraction of Bertha and Edward to each other, and like Strindberg skillfully traces the transformation of love into hate. Bertha is intellectual, restless, and sensitive, but so strongly sexed that she debases herself before a cloddish man of property. Edward is a completely realised character, who just misses being a caricature of the middle-class Anglo-Saxon — unimaginative, narrowhy patriotic, energetically a good fellow, conservative, virtuous. He is a stupid and a happy man. He has no doubts, no struggles, no self-criticism. With a touch of dry humour, Maugham makes him a product of his own school in Canterbury. Long before Edward is killed in an accident, Bertha has lost all her love for him. After

she sees his body before the flattering ministrations of the embalmer, she jubilantly feels herself free. With composure she picks up the book she had been reading when her dead husband was brought home, and begins reading again. Both husband and wife are intolerant and inelastic; both are detestable. As a result the novel lacks warmth and charm, although it possesses vigour and reality. It is one of Maugham's best novels.⁽¹⁾

The Making of a Saint

Liza of Lambeth が成功した時、出版屋 Fisher Uuwin から、貧民窟をテーマにした、もっと長い作品を書くようすすめられたが、彼の心の中では、成功を追ってはならぬ、それを避けなければならぬという気持があった。又一方フランス人から roman régional (地方文学) にあまり重きをおかないことを学んでいた。その頃、*Liza of Lambeth* とはまるで違った小説を書きあげていた。それは、ルネッサンス時代のイタリアを舞台とする小説で、Machiavelli の「フロレンス史」を読んでヒントを得たものである。その動機となったのは、Andrew Lang の小説技法についての論文を読んだことであった。Lang は、若い作家は、同時代の風俗習慣が書けるほどの人生体験をつんでいない。歴史は、物語や人物を、供給するし、若い血に燃えるロマンチックな情熱は、こうした種類の作品に必要な刺激を与えると説いていた。後日、彼は、そのことの誤りを指摘している。第一に、若い作家が、同時代の事を書けるだけの知識を持ちあわせていないということは事実ではない。歴史小説は、一見、違った風俗習慣や、違った考えを持っているので、ひどく自分等と毛色の変って見える人間から、生きた人間を創造するのだから、人間について、深い経験を必要とするのは白明の理である。また過

(1) Richard Cordell: op. cit. pp. 117-118.

去を再現するには知識のみならず、想像力がある。Andrew Lang の言ったことと実は反対なのである。世俗の知識を得、人間の本性をえぐる直観を身につけ、過去の人物を理解し再現できる、晩年こそ、歴史小説に向うべきであるが、しかし自分は、Lang のいうまちがった意見にしたがって歴史小説を書いたと語っている⁽¹⁾。Maugham は、円熟の境地に達して、*Then and Now* (1946) の中で Machiavelli と Caesar Borgia について、又 *Catalina* (1948) でスペインの黄金時代の事を書く迄、歴史小説は書かなかった。

The Making of a Saint は、ルネッサンス時代のイタリアの Forli の歴史上のある事件から、題材が選ばれている。医学生の時、イタリアに行きイタリア語を勉強して、Machiavelli に興味を覚え、愛読した「フロレンス史」の第8巻の中で、夫 Girolamo Riario が暗殺された時、妻の Caterina Sforza の身に起った物語を読んだ。London に戻るや、病院の余暇を盗んで、大英博物館の図書館で、詳細の史実を調べあげた。長い休暇を利用して Capri 島へ行き、この小説を書きあげたのである。

Caterina Sforza はこの小説の中の唯一人の人物で、あとは、きらびやかなルネッサンスの野望、謀略、残酷、欲情の物語である。物語の中に、ルネッサンスの自由さをもって生きている二人の女が出てくる。一人はブロンド、もう一人はブルーネットである。ブロンドは、Riario 党の兵士の妻である。彼はブルーネットが、不貞と見て、ブロンドと恋におちいる。彼女は小性に化けて、主人公と逃亡する。Orsi から逃げて自宅にたどりつくや結婚する。最初の愛人が不意にあらわれる。不貞の故にその愛人を殺し、自分の妻を家族にあずけるが、家族の者は、家名挽回の為、彼女をさし殺す。兵士は、最後にフランシスコ派の僧となる。Maugham は「Fisher Unwin は、この作品を受けとった時、きっと驚いたに違いなかった」と言っている。

この本は、抑評家から手きびしくこきおろされ、読者もつかず、選集か

(1) *The Summing Up*, Chap. 43, p. 163.

ら除外されたのも当然であった。大衆、暴民、支配者、人間の弱さについての彼の皮肉な、性急な観察は、その時代のロマンチックな歴史小説の中であって場ちがいもはなはだしかった。

The Hero

The Hero は *Mrs. Craddock* と同様に、Maugham が少年時代を過した Kent 州を舞台にしている。*Mrs. Craddock* が実は先に書かれていたが、出版の引き受け手がなかったので、*The Hero* が先に出されている。この小説のストーリーは簡単である。互に相愛しているが、一方が敬愛の気持を持っており、他がそれを失ったことにより間隙を生じる、二人の人間の葛藤の物語である。このテーマを20年後に使って *The Unknown* という最も興味ある戯曲を作り上げたのである。これはボーア戦争に暗示をうけ、又フランス小説の研究に影響されたもので、Maugham 自身も、陰惨で、非妥協的で、退屈なので、校正の時以来一度も読んでいないと語っている。当時彼は、Flaubert に心酔していたので、非常に長ったらしい風景描写をやったが、そんな描写は三行以内に制限するという規則を設けるべきで、その行数で、一つの風景を書けないなら、読者の想像にまかせた方がよいとも言っている。

James Parsons は若き職業軍人で、父が軍人として失敗した償いをしなければならぬという観念を植えつけられて育った。少年はボーア戦争に出征する。勝利をおさめて帰郷すると、観迎されるが、自分の英雄的行為は、激戦の最中における自然の反応とわかっているので、その観迎をうける気持になれない。James は、戦争の中に、英雄的なものを見出すことはできぬ。自分は興奮を好む故戦うのであり、より大きく強い者が勝ち、それが戦争の全てであると語る。1901年代において、この様な考え方を持つことは、知性的で、勇敢なことであった。この物語には二人の婦人が登場する。一人は Mary と言い、大佐の娘で、彼の婚約者である。もう一人は Mrs. Wallace といい、James の連隊の Major の寡婦である。前者は、やぼで、鈍感な女、

後者は、頭がよく、すれっからしの女である。後者に求愛するが拒絶されて、前者に戻って行くが、Maryは彼をうけつけない。Jamesは、自殺をする。この小説で、Maughamははじめて、真剣な人物描写と、社会批評を試みている。しかし、青年作家は、この種の心理的問題に取り組むには未だしの感があった。*Of Human Bondage*を書けるような舞台で、彼に喝采するまで、一般大衆は、彼が、もっと簡単な物語の作家としてしか評価していなかったのである。Cordellも、Maughamの作品の研究家にはなにがしの興味はあろう。何故なれば、ハッとさせられる観察、ゆがんだユーモア、彼の手法が円熟期に入って巧みに扱うことになる人物の原型があるからだだが、話自体は、馬鹿げていて、主人公の英雄が敬虔なMaryとの結婚から逃れるため、自殺を犯す結末はグロテスクだと批評している⁽¹⁾。

The Merry-Go-Round

Miss Ley (*Mrs. Craddock* に現れた) が、この小説にもあらわれ、効果を出している。全て人物は、彼女と Dr. Hurrell の廻りに、回転木馬の如く転開する。必要に応じて、援助と助言を措きまぬこの二人は、ロンドンの独身男性、女性のよき典型である。この二人は諸々の物語のつなぎの役を演じる。Maughamは一つの新機軸を出さんものと、実験を試みている。この物語は四つの long-short story (中篇小説) からできている。互に何の関連もない、いくつかの事件の中に暮しているが、同じ重要さを持ち、ある時点で、つながりのある事件を同時に進行させることができたなら、人生をより真実に描き出せるのではないかと思った Maugham は、次の如く語っている。「私は同じ世界に住んでいる人人同志の関係に似た漠然とした関係しかもたぬ幾人かの人物をとらえて来て、同じ程度の詳しきで、彼等全部の話を書き、彼等のすべてについて、私の知っている全てを語ることによって、人

(1) R. Cordell: op. cit., p. 116.

生についての遙かに充実した印象を与えることができるだろうと考えた。私は必要な数の人物をえらび、同時に起る四つの物語を工夫した。ちょうどイタリアの修道院にある大きな壁画のなかで、あらゆる風俗の人人があらゆる多類多様なことを行っているが、観る者は、それを一瞬のうちに収めることができる、そういう壁画のようなものとして、私は自分の小説を考た。この計画は野心的にすぎて私の力に及ばなかった。……だがそれでも私はこの思いつきには何かがあると思っている。あるいはこれらの交錯する複数の物語と、それに登場する人物とが、厳密に作中人物の一人の眼を通して見られていたら、うまく書けたのかも知れぬ。この人物が、おのれの関係を持つさまざまな出来事に対してもつ関心によって、それらの事件に統一を与え、小説中の他の人物に対する彼の反応から生ずる劇的な価値が、読者に単一のテーマが存在するかのようなイルウジョンを与えて、その注意をそらせずにすんだ⁽¹⁾かも知れないのである」

たしかにこの作品には、作者が競って書いた様子がうかがえるが、それは彼が、大英博物館に通つて、華麗な散文の中で用いようと、宝石やその他の美しい品名を研究し、メモをとりなどしていた頃であったのである。又 aesthetes (美文派) の時代に遭遇し、有害な影響をこうむった事も事実であろう。 *Liza of Lambeth* は別として、最も興味のあるもので、London 社会について書かんとする大がかりの実験があり、彼の後の作品に出てくる人物、及び場面の原形をなすものが散見される。彼の最も得意とする中篇への試み(勿論それは無意識であったことは明白であるが)があらわれている。多くの郡をなす人物を処理せんとする試みであったが、個々の物語が互に連関していないが故に不成功に終っている。舞台廻し役の Miss Ley と Dr. Hurrell が出会い、語る時に、何物にもまして、面白い。特に Dr. Hurrell と Miss Ley の語る言葉の中に、Maugham 哲学の萌芽を発見する。この作

(1) Preface to *Liza of Lambeth*, pp. xxiii-xxiv. (Heinemann).
(Cf. *The Summing Up*, Chap. 44, pp. 167-168)

品は、彼の研究の豊富な史料集で、色々な点で、彼の修業時代の最も立派な試作品であった。

The Bishop's Apron

この作品は面白い farce で英国ユーモア作家 P. G. Wodehouse の初期の作品に似ていて、軽い筆致で書かれている。 *Liza of Lambeth* の序文に「当時私はさる若く魅力ある人に恋着して、その人は私の乏しい懐中ではとても賄いきれない絢爛たる趣味の持主であった。私より裕福な恋人たちが、彼女を Savoy の晚餐や、 Maidenhead での日曜日の午餐に連れてゆくときに、相伴させられるのは、私にとって屈辱であった。そこで私は、私も彼女の軽はずみな魂が求めてやまぬ悦楽を彼女に提供してやりたい一心で、腰を落着けて、この陽気で面白い小説を書いた」とあるが、恋愛の資金調達のため書いたものであった。この物語は、1911年迄上演されなかった *Loaves and Fish* という戯曲の中で扱っているが、劇は一場にだけ限定され、登場人物や物語りは、制限されている。中心人物は Canon Sprattle で、ウェスト・エンドの牧師の、 Maugham 流の諷刺である。同じ人物は、 *The Explorer* の中にも顔を出し、そこではハンサムで、都雅で、いんぎんで、主教になるにふさわしい人物となっている。娘を貴族に、僧職にある息子を金持の醸造業者の娘に、それぞれ結婚させようとしている。彼は男やもめで、恋の虜となり、古いなじみの金持の寡婦にプロポーズする。その求愛と拒絶の場面が、ユーモラスに描かれている。小説の場合、息子が相手の娘 Gwen に愛情を持たず、父が代役を務めるが、求愛ぶりが天晴れで、それだけでこの Canon に愛着が持たれる。もう一つの笑劇的な場面は、bishop の職を求める所で、素晴らしいユーモアと皮肉をもって書かれている。「この作品は、若き日の Maugham の生气横溢する farce で、その成功は当然であり、再版されれば、大いに⁽¹⁾ 楽しめるであろう」と Brander も言っている。

(1) Laurence Brander : op. cit., p. 22.

The Explorer

これは上演されぬ同名の戯曲を小説化したもので、有名な探険家 Henry Morton Stanley 卿をモデルにして、生計に窮したあげく、一ヶ月で書き上げたと言われている。The Explorer は真面目な主題であるが、手のこんだ喜劇の脇筋がある。アフリカから戻った Alec MacKenzie は広大なアフリカの奴隷売買を粉砕した人物である。しかし、この作品は Lucy Allerton という女の Alec によせる恋の物語でもあり、又投機に全財産を費消し、諸々の寡婦達の金を使い尽して、獄につながれる Lucy の父親の物語でもある。Lucy の兄の George、彼は弱さと悪の権化のような人間だが、Lucy の求めでアフリカにつれて行かれる。彼はあらゆる悪事の末、自らの命を絶つ。Alec はアフリカから凱旋し、観迎されるが、同時に George の死の事で新聞にたたかれる。彼の弁護のできる人間は皆死んでいるので、彼は黙して語らない。Alec は意志の強い、寡黙の人間で、英国政府の援助を受けず、自費でアフリカ人の正義のために戦っている。しかし、ほんとうの話は、恋愛の物語で、場面は華かなロンドン、その背景に初期の作品の人物、例えば Canon Sprattle (*The Bishop's Apron*) 等が出てくる。今は懐かしのロンドンが描かれ、Edward 王朝の全てが我々に与える時代がかった魅力を持っており、手のこんだ喜劇的脇筋が、話を一層軽快に展開させる。Maugham の自家薬籠中の作品と言うべきものである。

The Magician

当時 Maugham は33才で、この一作に非常に苦心し、素材を一つにまとめるのに長時間を費したのであった。主人公の Oliver Haddo は、ペルリン博物館の Alessandro del Borro の肖像画と、フランス滞在中で来た知人の Aleister Crowley という人物をもとに、創り出されていたのである。Crowley は、悪魔崇拝、神秘現象、魔術にこっていたのであるが、当時の

パリには、そうしたものが一種の流行となっていて、これは Joris Karl Huysman の *Là Bas* (彼方に) という恐怖小説によって惹き起されたものであった。Maugham 自身も、Huysman に対する尊敬がなかったら、この小説は書かなかったであろうと言っている。場面は、Maugham が Gerald Kelly, Arnold Bennett, Clive Bell 等の友達と暮していた当時のパリである。魔術師 Haddo が妻を Hampshire の大邸宅につれてくると、陰うつさと恐怖がたちこめる。彼はヒロインの Margaret に催眠術をかけるが、これは彼女に結婚せんとしている外科医に復讐するためである。彼は、彼女に結婚し、自分の実験の用意をする。彼は小人をつくるため処女の血液が必要なのである。それで Hampshire につれてきたのである。外科医は、フランス人の医者で、エジプトで black magic を研究した Dr. Porhoet の助けをかりて彼女を救出しようとする。その救助は失敗し彼女は死ぬ。Porhoet は魔術師を物質化することに成功する。Haddo は自分の創り出した小人達と、焼死してしまう。Brander も、「Maugham がこんな作品に手をそめたとは、信じられぬ」ともらしている如く、実に荒唐無稽の物語である。田中西二郎氏のこの作に対する考え方には、傾聴すべきものがあると思はれるので、附記しておこう。

「この小説の標題の〈魔術師〉とは Oliver Haddo の事で、すなわち作品は Haddo という怪人物を拉し来て、現代の花の都パリに超自然の怪異な力をもつ一人の〈魔術師〉を描いてみせた。これがこの一篇の主題であっていわば一種の怪奇小説、恐怖小説である点で、モームの作品系列では、とびぬけた、特殊な作品である。もつともこの種の小説がイギリスにはめずらしくはなく、多角的才能の持主であるこの作家が、一度はこころみたくなくても当然と思われるジャンルと見られるであろう。スティヴンスンの『ジークル博士とハイド氏』、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』は、いまでもこれら両作家の最も有名な作品の一つに数えられているが、どちらも現代的背景の前に大胆な超自然的、非

合理的な事件を押し出している点が、その際だった特色をなしている。
〈魔術師〉もプロットのこうした離れ業によって、これら先輩の著名な作品と太刀打ちを挑もうとする若い作家の野心作とみられぬことはない」

「この小説で、モームは、よく言われる耽美主義的傾向を、ほかのどの小説よりも色濃く示している。ペイターからワイルドへと受け継がれ発展させられたイギリス唯美主義運動の雰囲気の中で青春を迎えたモームとしては、魔術という言葉の連想だけでも、ペイターが『ルネッサンス』で語ったモナ・リサの異教的な美や、ワイルドの『サロメ』に示された古代的幻想が浮んで来るのは、少し月並すぎるほど自然なことだが、こうした近い過去の有名な作品から大胆な引用を敢てしながら、それが装飾的效果を挙げ、物語の色調の統一に役立っているのは、やはり作者が『非常に骨を折り、素材を一つにまとめるのに苦心した』痕を示す一例であろう。なぜならモナ・リサもサロメも、彼女たちを近代の文学に復活させた世紀末の唯美主義黒潮そのものも、見方を変えると、この小説でモームが企てているもう一つのモチーフ—— 『魔術とは何か？』という問いに知的に答えようとする意図から取り扱われているからである」⁽¹⁾

(未完)

(1) 田中西二郎：魔術師，解説（サマセット・モーム全集第29巻，新潮社）

